Paṭhamasambodhi 第14章 Parinibbānakathā 訳注研究(2)

岩　井　昌　悟

はじめに

本稿では George Cœdès の校訂になる Paṭhamasambodhi の第14章 Parinibbānakathā の訳注研究の(2)として，校訂本の236頁16行目から241頁12行目までを訳出する。[(1)]

舎利弗と目連を失った釈尊が，舎衛城の東園鹿子母講堂において阿難に対して自身の老いを示してから，ヴェーサーリーにおいてリッチャヴィ人に法を説き，「象の眺め」によってヴェーサーリーに別れを告げ，チャーパーラ・チェーティヤにおいて，阿難に自身の延命の可能性をほのめかし，マーラに３ヶ月後の般涅槃を約し，捨寿行を行なうまでである。

Dīghanikāya 16，*Mahāparinibbāna-suttanta*（vol. II, pp.99-122）との注目すべき異同を示すならば，*Mahāparinibbāna-s.* では捨寿行の記述の後に，ヴェーサーリーの大林重閣講堂に諸比丘を集めて３ヶ月後の般涅槃を告げる段が置かれ，「象の眺め」によってヴェーサーリーを眺めた後，バンダ村に向かう。しかし *Paṭhamasambodhi* では「象の眺め」の後に捨寿行を行ない，チャーパーラ・チェーティヤから（ヴェーサーリーに戻ることなく）直接バンダ村に向かうのである。またアンバパーリーが登場せず，そのため釈尊は支障なくリッチャヴィ人からの翌日の食事の招待を受ける。

凡例

1．The *Paṭhamasambodhi*, ed by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, 2003を底本とし，異読の参照は同校

(1) *The Paṭhamasambodhi*, ed. by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, Oxford, 2003, pp.236-241.

定本の脚注のものに限る。

2．異読の採用は以下の原則に則る。

①固有名詞については，異読の中に，より一般的な，または正しい綴りが得られる場合は訂正し，脚注に底本に挙がる形を示す。異読になければそのままとし，脚注に一般的な，または正しい綴りを＊を付して示す。

②固有名詞以外については，異読の支持が得られる場合は，訂正して脚注にその旨を明記して底本の形を示す。異読の支持なく emendation を施す場合，本文に＊を付して訂正し，脚注において底本中の当該の語に下線を付す。

3．内容に関する注釈は和文に脚注を付す。

4．［　］内の数字は校訂本の頁の数字を示す。

5．改行は適宜，任意に行った。

6．（,）（.）などの句読点は底本のままに記載して訂正は加えていない。しかし和訳においては必ずしもそれに従わない。（:）ではじまるセリフについては“　”を補ってより明確を期した。‘　’は考えた内容，または仮定されたセリフを示す。

7．本稿注に言及する *Dīghanikāya*，*Saṃyuttanikāya*（*SN.*），*Aṅguttaranikāya*（*AN*）などのパーリ聖典やアッタカターの引用および訳は Chaṭṭha Saṅgāyana Tipitaka Version 4.0（CST4）（http://www.tipitaka.org/cst4 からダウンロード可）のテクストに基づいている。ただし頁は PTS の該当箇所の頁で示す。

XIV　Parinibbānakathā（承前）

tasmiṃ pana parinibbute dvi-aggasāvake[(2)] bhagavā vigata-aggasāvako ahosi. yathā pana mahājamburukkho parijiṇṇo *pavana-bahalo samuddhaṭa-viṭapo[(3)] dve mahāsākhā paṭhamaṃ bhaggā evam eva bhagavā *parijiṇṇo[(4)] mahājamburukkhopamo dve aggasāvakā mahās-

(2) dvi-aggasāvake. 底本は dve aggasāvake. 単数扱いされているため，異読（C）を採用するほかはない。

(3) pavana-*bahalo samuddhaṭa-*viṭapo. 底本は parijiṇṇopavana-bahala-samuddhaṭa-viṭapo.

ākhūpamā［237］vipatti-pavana-*samīritā[5] paṭhamaṃ patanti.[6]

その二大弟子が般涅槃した時に，世尊は主要弟子を失った。あたかも老朽した大ジャンブ樹が，風に満たされて，枝を引き抜かれ，二本の大きな枝が最初に折れるのとまったく同様に，大ジャンブ樹のような世尊は年老い，大枝のような二大弟子が，失壊の風に揺れて，最初に落ちた。[7]

*patite[8] pana dvi-aggasāvake[9] mahāsākhāsaṃkhāte bhagavā vigatasobhā ahosi. yathā pana cakkavattirājā vigataparināyako tathā bhagavā vigata-aggasāvako. avasiṭṭho yeva ānando eko *samīpe[10] ṭhito chāyā viya bhagavato sarīraṃ avijahanto.

大枝と称される二大弟子が落ちた時に，世尊は光輝を失った。まるで

---

(4) *parijiṇṇo. 底本は parijiṇṇa- とする。

(5) -*samīritā. 底本は -samiritā とする。

(6) ここを章の切れ目とする異読が 2 つある。dve aggasāvakaparinibbānaparivutto（P_0），nitthito pathamasambodhidesāno dve aggasāvakaparivatto niṭṭhito（P_4）.

(7) *SN*.047-013（vol. V, p.163）: seyyathāpi, ānanda, mahato rukkhassa tiṭṭhato sāravato yo mahantataro khandho so palujjeyya; evam eva kho ānanda, mahato bhikkhusaṅghassa tiṭṭhato sāravato sāriputto parinibbuto.

あたかも大きな，心材を有する大樹がたっていて，そのより大きな幹から先に折れるように，まさにそのように，阿難よ，核を有する大いなる比丘サンガがあって，舎利弗が般涅槃した。

上記の *SN*.047-013の文章について *SN*-aṭṭhakathā（vol.Ⅲ, p.224）は，比丘サンガを大ジャンブ樹（mahājamburukkha）に喩え，舎利弗を右枝に喩えている。

evam eva kho ti ettha yojanasatubbedho mahājamburukkho viya bhikkhusaṅgho tassa dakkhiṇadisaṃ gato paññāsayojaniko mahākhandho viya dhammasenāpati. tasmiṃ mahākhandhe bhinne tato paṭṭhāya anupubbena vaḍḍhitvā pupphaphalādīhi taṃ ṭhānaṃ pūretuṃ samatthassa aññassa khandhassa abhāvo viya there parinibbute soḷasannaṃ paññānaṃ matthakaṃ pattassa aññassa dakkhiṇāsane nisīdanasamatthassa sāriputtasadisassa bhikkhuno abhāvo.

まさにそのように，とは，ここで比丘サンガが100由旬の高さの大ジャンブ樹のようであり，法将軍（舎利弗）が，その右方の50由旬の大枝のようである。その大枝が折れて，その後，次第に成長して花・果実などによってその地位を満たすことができる幹が他にないように，〔舎利弗〕長老が般涅槃した時，16の智慧の頂上に到達した，右座に坐ることができる舎利弗のような比丘は他にいなかった。

下線を付した「16の智慧」については拙稿「パーリ十六慧と北伝「～慧者」リストの対応関係」『日本仏教学会年報』第73号，2008年，pp.71-94（L）参照。

(8) *patite. 底本は patante.

(9) dvi-aggasāvake. 底本は dve aggasāvake. 本稿注 2 参照。

(10) *samīpe. 底本は samipe.

転輪聖王が将軍〔宝〕を失ったように，世尊は主要弟子を失った。阿難ひとりだけが残され，影のように世尊の體を離れずに，近くにあった。

bhagavā ekadivasaṃ jetavanato gantvā pubbārāme migāramātuyā pāsāde viharanto sāyaṇhasamaye paṭisallānā vuṭṭhito pāsādassa pacchimadisābhāge nisinno hoti. āyasmā ānando bhagavantaṃ piṭṭhiṃ otāpayamānaṃ disvā āgantvā vanditvā bhagavato piṭṭhiṃ parimajjanto nisīdi. so bhagavato piṭṭhiṃ parimajjanto dvinnaṃ aṃsakūṭānaṃ antare *suvaṇṇapattāvaṭṭaṃ viya kesaggappamāṇaṃ *valiyāvaṭṭaṃ[11] disvā *sañjātabalavasaṃvego[12] ‘evarūpe nāma sarīre *jarā[13] paññāyi’ ti. thero jaraṃ garahanto bhagavantam etad avoca:

[14]世尊はある日，祇園から出て，東園鹿子母講堂に住し，夕方に独坐から立って，講堂の西側に坐っていた[15]。長老阿難は，世尊が背中を陽にさらしている[16]のを見て，やってきて，礼拝し，世尊の背中をさすりなが

---

(11) *suvaṇṇapattāvaṭṭaṃ viya kesaggappamāṇaṃ *valiyāvaṭṭaṃ. 底本は suvaṇṇapattaṃ viya kesaggappamāṇaṃ vallivaṅkaṃ. なお本稿注17を参照のこと。

(12) *sañjātabalavasaṃvego. 底本は bahalasañjātasaṃvego. 異読 balavasañjā（C）を参考にして訂正する。なお本稿注17を参照のこと。

(13) 底本は evarūpe nāma sarīre paññāyi. 欠落している jarā を補う。註17参照。

(14) 以下の記述は *SN*.048-041（vol. V, p.216）にある。

(15) *SN*.048-041の註に次のようにある。

SN-A（vol. III, p.243）*pacchātape* ti pāsādacchāyāya puratthimadisaṃ paṭicchannattā pāsādassa pacchimadisābhāge ātapo hoti, tasmiṃ ṭhāne paññattavarabuddhāsane nisinno ti attho.

「西の暖かい所に……」とは講堂の陰によって東側は覆われているので，講堂の西側が暖かいのである。そこに用意された最上の仏座に坐ったという意である。

(16) *SN*.048-041の註に次のようにある。

SN-A（vol. III, p.243）*piṭṭhiṃ otāpayamāno* ti yasmā sammāsambuddhassa pi upādinnakasarīre uṇhakāle uṇhaṃ hoti, sītakāle sītaṃ, ayañ ca himapātasītasamayo. tasmā mahācīvaraṃ otāretvā sūriyarasmīhi piṭṭhiṃ otāpayamāno nisīdi.

kiṃ pana buddharasmiyo madditvā sūriyarasmi anto pavisituṃ sakkotī ti? na sakkoti. evaṃ sante kiṃ tāpetī ti? rasmitejaṃ. yath’ eva hi ṭhitamajjhanhike parimaṇḍalāya chāyāya rukkhamūle nisinnassa kiñcāpi sūriyarasmiyo sarīraṃ na phusanti, sabbadisāsu pana tejo pharati, aggijālāhi parikkhitto viya hoti, evaṃ sūriyarasmīsu buddharasmiyo madditvā anto pavisituṃ asakkuṇantīsu pi satthā tejaṃ tāpento nisinno ti veditabbo.

「背中を〔陽に〕さらしつつ」とは，等正覚者が取った身体も暑い時には熱くなり，寒い時には冷たくなる。これは雪の降る寒い季節であった。それゆえ大衣をおろして太陽光に背中をさらしつつ坐っていた。

ら坐った。彼は世尊の背中をさすりながら，両肩の間に黄金の鉢の渦のような，毛先ほどの〔細さの〕すじの渦（皺のこと）を見て，「このような〔世尊の〕御身体に老いが見られようとは」と強烈な戦慄を生じ，[17]〔阿難〕長老は，老いを非難しながら，世尊にこう言った。

“acchariyaṃ bhante *abbhutaṃ[18] bhante na cev’ idāni bhante tathāgatassa kāyo parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto sithilāni ca te[19] gattāni susaṇṭhitavalījātāni purato ca bhante kāyo pabbhāro” ti sutvā bhagavā etad avoca[20]:

「尊師よ，不思議なことです。尊師よ，めずらしいことです。尊師よ，今，如来のお身体は清浄でなく，お肌の色は浄潔ではありません。そして皺が深くきざまれたあなたの肢体は力がなく，そして尊師よ，お身体は前に傾いています」と聞いて，世尊はこう言った。

“evam eva ānanda jarādhammo yobbane byādhidhammo ārogye maraṇadhammo jīvite na cev’ idāni ānanda tathāgatassa kāyo parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto sithilāni ca me gattāni susaṇṭhitavalījātāni purato ca [238] ānanda[21] kāyo pabbhāro dissati indriyānaṃ aññathattaṃ cakkhundriyassa sotindriyassa ghānindriyassa jivhindri-

---

（問）ブッダの光を突き破って，陽光が中に差し込むことができるのか？（答）できない。（問）それならば何が暖めるのか？（答）光の熱である。正午に樹下の円い陰に坐っている者の身体には，たとい太陽光が触れることはなくても，熱は一切の方向に遍満する。まるで火焔に囲まれたように。このように太陽光はブッダの光を突き破って中に差し込むことはできなくとも，師は熱を熱して坐っていたと知るべきである。

(17) *SN*.048-041の註に次のようにある。

SN-A (vol. III, p.244): *acchariyaṃ bhante* ti thero bhagavato piṭṭhito mahācīvaraṃ otāretvā nisinnassa dvinnaṃ aṃsakūṭānaṃ antare suvaṇṇāvaṭṭaṃ viya (Tīkā: *suvaṇṇāvaṭṭaṃ viyā* ti acche suvaṇṇapatte vinivatta-āvaṭṭaṃ viya) kesaggappamāṇaṃ valiyāvaṭṭaṃ disvā ‘evarūpe pi nāma sarīre jarā paññāyatī’ ti sañjātasaṃvego jaraṃ garahanto evam āha. garahanacchariyaṃ nāma kir’ etaṃ.

「尊師よ，不思議なことです……」とは〔阿難〕長老は背中から大衣をおろして坐っている世尊の両肩の間に，黄金の〔鉢に見られる削り出し痕の〕渦巻きのような，髪先ほどの〔細さの〕すじの渦（皺のこと）を見て，「このような〔仏の〕身体にも老いが見られようとは」と戦慄を生じ，老いを非難してこのように「尊師よ，不思議なことです。……」と言った。これは「非難の驚愕」(garahanacchariya) であると伝えられる。

(18) *abbhutaṃ. 底本は abbhūtaṃ.

(19) te. 底本は bhante. 異読（C）を採用する。

(20) 底本に欠落している etad avoca を異読（C）によって補う。

(21) ānanda. 底本は me. 異読（C_1 H P_0）を採用する。

yassa kāyindriyassā” ti

「阿難よ，確かにそうだ。若さに老法があり，健康に病法があり，寿命に死法がある。阿難よ，如来の身体は清浄でなく，肌の色は輝いていない。そして皺が深くきざまれた私の肢体は力なく，そして阿難よ，身体は前に傾いている。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根の諸根には変異が見られる」と。

“ahaṃ ānanda etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addhagato vayo-anuppatto[22] asīti-āyuko pavattati seyyathāpi ānanda jarasakaṭaṃ[23] veḷu-missakena yāpeti evam eva kho ānanda samādhimissakena me kāyo yāpeti tasmāt ih’ānanda[24] attadipā viharatha attasaraṇā anaññasaraṇā dhammasaraṇā” ti. evaṃ bhagavā therassa jaraṃ attano deseti. desan āpariyosāne bahūnaṃ devatānaṃ tattha dhammābhisamayo ahosi.

[25]〔世尊はさらにつづけて〕「阿難よ，私は今，年老い，年たけ，老いぼれて，年を重ね，老齢に達して，80歳になった。阿難よ，あたかも古い車が，竹紐で結ぶことでなんとか使用に耐えるように，まさにそのように，阿難よ，三昧で結ぶことで私の身体はなんとか持ちこたえているのだ[26]。[27]それゆえ，阿難よ，自身を島として，自身を帰依処とし，他のも

---

(22) vayo-anuppatto. 底本は vayo anuppatto と切っている。

(23) jarasakaṭaṃ. 底本は jarasakaṭaṃ vā とする。異読（C）にしたがって vā を削除する。

(24) tasmātihānanda. 底本は tasmā gihānanda. 異読（H P_0）を採用する。

(25) 以下の釈尊の言葉は *Mahāparinibbāna-s.*（vol. II, p.100）の他に *SN*.047-009（vol. V, pp. 153-154）にもある。この言葉は *Mahāparinibbāna-s.*と *SN*.047-009の文脈では，竹林村（Beḷuvagāmaka）において病にかかった釈尊が留命行によって病を克服した直後に語られる。

(26) veḷumissakena. 異読に veddhumissakena（C）がある。これを*vedhamissakena と読めば vedha=vegha（革紐）であるから「革紐で修繕することで」となる。

(27) アッタカターには以下のようにある。

DN-aṭṭhakathā（vol. II, p.548）と *SN-aṭṭhakathā*（vol. III, p.204）: *veṭhamissakenā* ti bāhabandhacakkabandhādinā paṭisaṅkharaṇena veṭhamissakena. …… arahattaphalave-ṭhanena catu-iriyāpathakappanaṃ tathāgatassa hotī ti dasseti.

「巻布で結ぶことで」とは〔車の〕腕を結ぶ，車輪を結ぶなどの修繕によって〔の意味で〕「巻布で結ぶことで」。……阿羅漢果という巻布で結ぶことで如来の四威儀路（行住坐臥）の営みがあるということを示す。

Udāna-aṭṭhakathā（p.330）: iti bodhimūle yeva avassaṭṭhabhavasaṅkhāro bhagavā vekhamissakena viya jarasakaṭaṃ samāpattivekhamissakena attabhāvaṃ yāpento pi ito temāsato uddhaṃ samāpattivekham assa na dassāmī ti cittuppādanena āyu-saṅk-hāraṃ ossajī ti.

のを帰依処とせず，法を帰依処としなさい」と。このように世尊は〔阿難〕長老に自身の老いを示した。説示の終わりに多くの神々にその場で法の現観が生じた。

punadivase bhagavā sāvatthiyaṃ piṇḍāya caritvā katabhattakicco pañcabhikkhusatehi saddhiṃ yena vesālī tena gantvā mahāvane kūṭāgārasālāyaṃ viharanto, ……

翌日，世尊は舎衛城において行乞し，食後に500の比丘とともにヴェーサーリーに行って，大林重閣講堂に住しつつ……[28]

…… atha te lacchavirājāno[29] bhagavato āgamanassa pavuttiṃ sutvā dīpa-dhūpa-gandha-mālādīni gahetvā āgantvā bhagavantaṃ pūjetvā vanditvā dhammassa savanatthāya nisīdiṃsu. tato bhagavā tesaṃ dhammaṃ desetvā, desanāpariyosāne ……

それから，ラッチャヴィ族[30]の王族たちは世尊が到来したことを聞きつけて，灯明・煙・香・花輪などを手にやってきて，世尊を敬い，礼拝し，法を聞くために坐った。それから世尊は彼らに法を説示し，説示の終わりに……[31]

…… atha te rājāno bhagavantaṃ svātanāya nimantesi.[32] bhagavā tesaṃ anukampāya tuṇhibhāvena paṭiggahetvā pāto vuṭṭhāya pañcabhikkhusatehi parivuto vesālinagaraṃ pavisitvā[33] antonagare bhattakiccaṃ katvā, katabhattakicco[34] tesaṃ dhammaṃ desetvā ovādaṃ datvā bhikkhusaṃghaparivuto nagarato nikkhamitvā nagaradvāre ṭhatvā: “idaṃ pacchima-

---

以上のように菩提樹下で有行を捨てた世尊は，革紐で結ぶことで車を動かすように，等至という革紐で結ぶことで自体を動かしながらも，「今より３ヶ月後には，等至という革紐の結びを自体に認めない」との心を起こして寿行を捨てた。

Paṭhamasambodhi の samādhimissakena「三昧で結ぶことで」という表現は，後者に近いであろうか。

(28) 直後に atha がつづくため，テクストの混乱か欠落が予想される。

(29) *licchavirājāno.

(30) 正しくは「リッチャヴィ族」である。

(31) ここにもテクストの混乱か欠落が予想される。「彼らを預流果…に安立させた」といった文が相応しい。

(32) nimantesi. 底本は nimantetvā，とする。異読（C_1 H）を採用する。

(33) pavisitvā. 底本は pavīsitvā. 異読（H P_0）を採用する。

(34) katabhattakicco. 底本は katabhattakicco bhagavā. 異読（C）により不要な bhagavā を削除する。

kaṃ vesāli-nagaraṃ[35] passāmī” ti sakalasarīren’ [239] eva parivattitvā nāgāvalokena oloketvā[36] taṃ ṭhānaṃ nāgāvalokacetiyaṃ nāma dassetvā tato mahāvanaṃ gantvā ānandaṃ etad avoca:

それから彼ら王たちは世尊を翌日の〔食事に〕招いた。世尊は彼らへの憐みから沈黙によって受け，早朝に立って，500の比丘に囲まれてヴェーサーリーの都に入り，都の中で食事をしてから，食後に彼らに法を説示し，教誡を与え，比丘サンガに囲まれて都から出て，都の門のところで立ち止まり，「これが最後である。ヴェーサーリーの都を私は見る[37]」と〔言って〕，身体全体で向きを変え，象の眺めによって眺めて，その場所を示して「象の眺めのチェーティヤ」とし，それから大林に行って阿難にこう言った。

“gaṇhāhi ānanda nisīdanaṃ yena[38] pāvālañ[39] cetiyaṃ ten’ upasaṅkamissāmi divā vihārāyā” ti. atha āyasmā ānando: “sādhu bhante” ti nisīdanaṃ ādāya bhagavantaṃ piṭṭhito anubandhi.

「[40]阿難よ，坐具をもて。私は昼の休息のためにパーヴァーラ[41]・チェーティヤに行く」と。それから阿難長老は「尊師よ，承知しました」と〔言って〕，坐具をもって世尊の後に随った。

atha kho bhagavā yena pāvālañ cetiyaṃ ten’ upasaṅkamitvā paññatte āsane nisīdi. thero bhagavantaṃ vanditvā ekamantaṃ nisīdi. ekamantaṃ nisinnaṃ āyasmantaṃ ānandaṃ bhagavā etad avoca:

それから世尊はパーヴァーラ・チェーティヤに近づいて，用意された座に坐った。〔阿難〕長老は世尊を礼拝して，一方に坐った。一方に坐っ

---

(35) vesālinagaram. 底本は vesāliṃ nagaraṃ. 異読（C_1 P_0）を採用する。

(36) nāgāvalokena oloketvā. 底本は nāgāvaloketvā. 異読（C_1 H）に従う。ただし「象の眺め」は nāgāpalokita（nāgāvalokita）であり，正しくは nāgāvalokitena oloketvā とあるべきであろう。

(37) *Mahāparinibbāna-s.*（vol. II, p.122）では idaṃ pacchimakaṃ, ānanda, tathāgatassa vesāliyā dassanaṃ bhavissati.「阿難よ，これは如来がヴェーサーリーを眺める最後になるであろう」。

(38) yena. 底本は yena ca. 異読（C）によって ca を削除する。

(39) *cāpālañ.

(40) 以下の記述は *Mahāparinibbāna-s.*（vol. II, p.102），*SN*.051-010（vol. V, p.258），*AN*.008-007-070（vol. IV, p.308），*Udāna* 006-001（p.62）に対応する。

(41) 正しくは「チャーパーラ」である。

た阿難長老に，世尊はこう言った。

“ramaṇīyā ānanda vesālī ramaṇīyaṃ gotamañ cetiyaṃ ramaṇīyaṃ pāvālañ cetiyaṃ yassa kassaci ānanda cattāro iddhipādā bhāvitā bahulīkatā[42] yānikatā vatthukatā anuṭṭhitā paricitā susamāraddhā so ākaṅkhamāno ānanda kappaṃ vā tiṭṭheyya kappāvasesaṃ vā katame cattāro iddhipādā chandiddhipādo viriyiddhipādo cittiddhipādo vimaṃsiddhipādo ce” ti.

「阿難よ，ヴェーサーリーは楽しい。ゴータマ・チェーティヤは楽しい。パーヴァーラ・チェーティヤは楽しい。阿難よ，誰であれ，四神足を修習し，多修し，乗り物のように行ない，礎のように行ない，確立し，積み重ね，よく努めたものは，望むならば，阿難よ，一劫もしくは劫の残りの間，留まることができる。四神足とは何か。意欲神足と精進神足と心神足と観察神足とである」と。

evaṃ thero bhagavatā oḷārike nimitte obhāse kariyamāne nāsakkhi paṭibujjhituṃ. na bhagavantaṃ yācati: ‘tiṭṭhatu bhante bhagavā kappaṃ, tiṭṭhatu sugato kappaṃ bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussānan’ ti.

このように〔阿難〕長老は世尊によって大まかなほのめかし・暗示がなされている時に，気が付くことができなかった[43]。世尊に「尊師よ，世尊は一劫の間お留まりください。善逝は，一劫の間お留まりください，多くの人々の利益のため，多くの人々の楽のため，世に対する憐みのため，天・人の利益・楽のために」と懇請しなかった。

kasmā thero bhagavantaṃ na yācati, mārena pariyuṭṭhitacitto tasmā bhagavantaṃ na yācati. evaṃ thero bhagavatā dutiyam pi tatiyam pi oḷārike nimitte obhāse kariyamāne paṭibujjhituṃ nāsakkhi.

どうして〔阿難〕長老は世尊に懇請しなかったのか。マーラによって心が憑依されていたからである。それゆえ世尊に懇請しなかった。このように〔阿難〕長老は世尊によって 2 回目にも 3 回目にも大まかなほのめかし・暗示がなされている時に，気が付くことができなかった。

---

(42) bahulīkatā. 底本は bahulikatā. 異読（C_1）を採用する。

(43) paṭibujjhituṃ. *Mahāparinibbāna-s.*（vol. II, p.103）と *SN*.051-010（vol. V, p.260）は paṭivijjhituṃ（洞察する）とする。

tato bhagavā āyasmantaṃ [240] ānandaṃ etad avoca: “gacchāhi ānanda vivekaṃ nisīdāhī” ti pesesi. athāyasmā ānando bhagavato vacanaṃ sutvā uṭṭhāyāsanā bhagavantaṃ vanditvā avidūre aññatarasmiṃ rukkhamūle vivekatthāya nisīdi.

それから世尊は長老阿難にこのように言った。「阿難よ，行きなさい。ひとりで坐っていなさい」と命じた。そこで長老阿難は世尊の言葉を聞いて座から立ち，世尊を礼拝して，近くのとある樹の下に独住のために坐った。

tasmiṃ ānande gacchante tadā māro yena bhagavā ten’ upasaṅkami, upasaṅkamitvā ekamantaṃ aṭṭhāsi. ekamantaṃ ṭhito kho māro bhagavantam etad avoca: “parinibbānatu dāni bhante bhagavā parinibbānatu dāni bhante sugato” ti bhagavantaṃ yāci.

その時阿難が立ち去るや否や，マーラが世尊に近づいた。近づいてから一方に立った。一方に立ったマーラは，世尊にこのように言った。「尊師よ，世尊は今すぐに般涅槃してください。尊師よ，善逝は今すぐに般涅槃してください」と世尊に懇請した。

ayaṃ kira māro bhagavato abhisambodhito paṭṭhāya aṭṭhame sattāhe ajapālanigrodhamūle yeva nisinnaṃ bhagavantaṃ disvā āgantvā: “bhante tumhe pāramiyo pūrento sabbaññutāñāṇaṃ icchanto idāni sabbaññutāñāṇaṃ labhitvā kim aṭṭhaṃ lokahitaṃ karotha mā attānaṃ kilamatha tasmā bhante ajja parinibbānakālo” ti bhagavantaṃ yāci.

伝えられるところでは，このマーラは，世尊の成道後第８週に，ちょうどアジャパーラニグローダ樹下に坐っていた世尊を見て，到来し，「尊師よ，諸波羅蜜を満たしつつ，一切知性智を望んでいた汝は，今や一切知性智を獲得しおわり，何のために世の利益をなすのか。自身を疲れさせることはない。それゆえ尊師よ，今日が般涅槃の時です」と世尊に懇請した。[44]

---

(44) 成道直後の釈尊にマーラが入滅を勧める件は *SN*.004-003-004（vol. I, p.122）:『雑阿含経』246（大正02　p.059上）にもある。また *Mahāparinibbāna-s*.（vol. II, p.104）の記事もこれを前提にして理解すべきである。註によればこれは梵天勧請の後に位置する。片山一良『長部（ディーガニカーヤ）大篇Ⅰ』大蔵出版，2004年，p.374，補注27参照。

tadā karuṇādhiko bhagavā mārassa vacanaṃ sutvā “na tāvāyaṃ parinibbānakālo” ti “yāva na me sāvakā bhikkhu-bhikkhuni-upāsaka-upāsikā viyattā vinītā visāradā bahussutā dhammadharā dhammānudhammapaṭipannā anudhammacārino ācariy-upajjhāyassa santikā sikkhaṃ gahetvā ācikkhissanti desessanti paññāpessanti vibhajissanti uppannaṃ parappavādaṃ sahadhammena suniggahitaṃ niggahitvā sappāṭihāriyaṃ devamanussānaṃ dhammaṃ desessanti na tāvāhaṃ parinibbāyissāmī” ti [241] bhagavā māraṃ paṭikkhipi.

その時，悲が優勢になった世尊はマーラの言葉を聞いて「まだ涅槃の時ではない」と〔言ってさらに〕「私の弟子たち，すなわち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちが，聡明となり，教導され，自信をもち，多聞となり，持法者となり，法の随法を実践し，随法行者となり，阿闍梨と和尚のもとで学び，告げ，示し，知らしめ，分析し，生じた異論を理にかなった〔言葉〕によって折伏してよく折伏されたものとし，天と人とに神変をともなう法を説くようになるまで，それまでは私は般涅槃しないであろう」と〔言って〕世尊はマーラを拒絶したとのことである。

evaṃ māro bhagavato abhisambodhito paṭṭhāya anugantvā yāva pāvālacetiyā bhagavantaṃ parinibbānaṃ yāci.

このようにマーラは世尊の成道後から，パーヴァーラ・チェーティヤまでつきまとい，世尊に般涅槃を懇請した。

atha kho bhagavā māram etad avoca: “māra mā dukkhi dummano ’si na ciraṃ tathāgatassa parinibbānaṃ bhavissati, ito tiṇṇaṃ māsānaṃ accayena parinibbāyissāmī” ti. sutvā māro: “sādhu sādhu bhante” ti pītisomanasso tatth’ eva antaradhāyi.

それから世尊はマーラにこう言った。「マーラよ，苦しみ憂うることなかれ。久しからずして如来の般涅槃があるであろう。これより 3 ヶ月の後に私は般涅槃するであろう」と。〔これを〕聞いて，マーラは「よいかな。よいかな。尊師よ」と歓喜して，その場で消え失せた。

atha bhagavā pāvālacetiye va *māghapuṇṇamadivase[45] ñāṇavajirena attano āyusaṃkhāraṃ paricchinditvā osajji. osajjite bhagavatā āyusa-

(45) *māgapuṇṇamadivase. 底本は māgapuṇṇamīdivase.

ṃkhāre tadā dasasahassalokadhātu kampittha mahābhūmicālo ahosi bhiṃsanako. devadundubhiyo ca phaliṃsu. megho gajjitaṃ gajji akālavijjullatā niccharimsu[46] khaṇikavassaṃ vassi. anekāni acchariyāni uppajjiṃsu.

それから世尊はパーヴァーラ・チェーティヤにおいて，マーガ月の満月の日に智慧の金剛によって自身の寿行を限定し，捨てた[47]。世尊が寿行を捨てた時，その時，一万の世界が震動した。恐ろしい大地震が生じ，天鼓（雷）が破裂した。雨雲が雷鳴を発し，時ならぬ稲妻が走り，刹那的な雨が降った。数々の稀有なことが起きた。

---

(46) niccharimsu. 底本 niccharimsu. 誤植であろう。

(47) マーガ月の満月の日は，般涅槃の日であるヴェーサーカ月の満月の日を２月15日とするなら，11月15日にあたり，般涅槃のちょうど３ヶ月前である。

なお *DN-aṭṭhakathā*（II 556），*SN-aṭṭhakathā*（III 253），*AN-aṭṭhakathā*（IV 152），*Udāna-aṭṭhakathā*（p.327）に以下のように註釈されている。

sato sampajāno āyusaṅkhāraṃ ossajī ti satiṃ sūpaṭṭhitaṃ katvā ñāṇena paricchinditvā āyusaṅkhāraṃ vissaji pajahi. tattha na bhagavā hatthena leḍḍuṃ viya āyusaṅkhāraṃ ossaji, temāsamattam eva pana samāpattiṃ samāpajjitvā tato paraṃ na samāpajjissāmī ti cittaṃ uppādesi.

「正念正知にして寿行を捨てた」とは，念を確立し，智により限定して，寿行を放った，捨てた。その際，世尊は手で土塊を投げ捨てるように寿行を捨てたのではなくて，「３ヶ月だけ等至に入り，それ以後は入らないようにしよう」との心を起こした。